

一次の文章は、二〇一一年に発生した東日本大震災による福島第一原子力発電所事故以後、電気の利用を極力おさえた生活を始めた元新聞記者が書いたものです。よく読んで、後の問いに答えなさい。

節電のため冷蔵庫のプラグを抜いた体験を書いたところ、テレビに出ませんかというお話を頂いた。大好きな高野山からの中継と聞き、釣られてノコノコでかけた私が浅はかであった。

想像をはるかに超える反響。中でも予想外の反発にたじろぐ。「お前は電車に乗らないのか。」「電気なしでは工場も動かぬ。」「高齢者にも節電を強いるのか。」

週刊誌からも取材がきた。尋問のごとく数時間で答えよと迫る某誌の質問状にも全力で答えたつもりだが、バカ、偉そう、さんざんな書かれようである。

いやはやテレビに出る人をソングケイします。皆さん心が強い！私一回で折れました。それにしても、節電生活を伝えることが批判的となることに驚く。血が上った頭を冷やし、そのわけを考えた。

もしや「恐れ」ではないか。電気否定は豊かさの否定につながる。貧しさのキョウヨウ。そう受け取られたのではないか。

改めて、我が家で使わなくなった家電製品を振り返ってみた。炊飯器、電子レンジ、冷蔵庫、ドライヤー、掃除機、洗濯機……社会人になり一人暮らしを始めたとき「これがなくては暮らせない」と、引越して当日に買いそろえたものばかりだ。

私とて、一つとして手放す気はなかった。それがなぜこんな地点まで来たのか。C テンキは掃除機との別離だったと思う。大震災前のことだが、エコ生活を始めた友人が「掃除機を捨てた。ほうきで十分。」と言う。ウンでしよと思つたがまあ試してみること。すると何ということか。私、まさかの掃除大好き人間になったのである。

元々掃除は苦手。母に「きれいにしなさい。」と何度叱られても面倒で、汚部屋から卒業できぬまま中年になった。それが今や、美しい江戸箒でシャッシャと床をはくのが毎朝の心落ち着く習慣である。軽い。すぐ出せる。音がきれい。で、部屋もきれい。すばらしい。私は掃除が嫌いだつたのではなく、重くコードがからまり騒音をたてる掃除機が苦手だつたのだと気づく。

「手放す」ことは、貧しく不便なのか。これでわからなくなった。

電子レンジは蒸し器でOK。ご飯も鍋でなんと炊ける。*アフロは自然乾燥。洗濯も風呂で日々手洗いすればよい。むしろ湯を使うので驚きの白さだ。

実は私、「家電の子」である。父は家電会社のエイギョウマン。狭い我が家にも最新式家電はいち早くドウニユウされ、友達がカラーテレビを見に来て誇らしかった。電子レンジのテンジ会では熱いおしぼりに感動した。手に入れる幸せをかみしめて育つた。

だが手放したあとにも幸せがあった。ご飯をふくら炊く手順、コウカのなつけ置き洗いの方法を探る日々は、自分の中に眠っていた力が生き生きと動き出す刺激に満ちている。これって、行き詰まりがちな人生を救うイノベーションではないか。

考えてみれば、便利なものを手に入れるとは、自ら考え工夫する機会を失うことでもある。得ることも失うことも結局は同じなのだ。なのに「あつたら便利」に執着し、「ないと不安」とおびえていた。

生きるとは、これほど自由で身軽なものか。それが今の正直な思いである。ところで、冷蔵庫のない暮らしは今も続行中。買った物はその日に食べる覚悟さえ決めれば、案外どうということはない。

問題は、たくさん作らないとおいしくない煮物。コウブツなのでこれは痛い。昔の人はどうしていたのかと、時代劇を見てピンと来た。お裾分けだ。子どもの頃、おかずを作り過ぎたと隣の人が総菜を持ってきた。あれは冷蔵庫がないころの名残であろう。プラグで接続されていなかった時代、人はつながりとやりくりで支え合つたのだ。

確かに、節電生活は世の情けなしには成り立たぬ。スーパーは我が家のかわりに冷蔵庫で食材を保存してくれている。暑さ寒さが厳しい日はカフェへ。銭湯へ行くのも習慣になった。近所全体が私の家なのだ。気づけばカフェ店主と世間話を楽しみ、銭湯ではジョウレンのおぼあちゃんに「若い人は肌がきれいねえ。」と言われて喜んでいる。

世の中は案外親切に満ちている。プラグを抜いて初めて気づいたことである。

(稲垣えみ子『アフロ記者が記者として書いてきたこと。退職したからこそ書けたこと。』による)

*注 汚部屋——汚い部屋のことをいうくだけた表現。

アフロ——アフロヘア。パーマで細かく縮らせて丸くふくらませた髪型。

イノベーション——技術革新。

問一——線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二——線部1「浅はかであった」とありますが、どのような点をそう思つたのですか、答えなさい。

問三——線部2とありますが、「さんざんな書かれよう」であつた理由を筆者はどのように考えていますか。解答らんに合わせて答えなさい。

問四——線部3「こんな地点まで来た」とはどういうことですか。分かりやすく説明しなさい。

問五——線部4「手に入れる幸せ」とは、どのような「幸せ」ですか、答えなさい。

問六——線部5「幸せ」とは、どのような「幸せ」ですか、答えなさい。

問七——線部6「プラグで接続されていなかった時代」とはどういう時代ですか、答えなさい。

問八——線部7「プラグを抜いて初めて気づいたこと」とはどのようなことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分は厳しく批判されたが、自分を批判する人たちも、地域の人のやさしさに触れたならその考えも変わるかもしれないということ。
イ 自分は自分の責任で生きていかななくてはならないが、困ったときには、周囲の人たちが手助けしてくれる場合もあるのだということ。
ウ 自分は自分の力で生きていく必要があるのだ、どのような問題がおこっても、他人の力を借りることがあつてはならないということ。
エ 自分は自分一人だけで生きていかななくてはならないのではなく、地域の中で、地域の人々に助けられて生きているのだということ。
オ 自分は人に批判される生活を送っているが、地域の人たちの中には批判する人だけでなく、評価してくれる人もいるのだということ。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日、講演の仕事で愛媛県の八幡浜市を訪れた。佐田岬半島の付け根にあるこの街は、四国随一の魚市場を持ち、また日本有数のみかんの産地で、温州みかんの銘柄産地としても有名である。

講演会の後で行なわれた地元の方々との茶話会では、参加者にさまざまな種類のみかんが振る舞われ、利き酒会ならぬ、¹「利きみかん会」の場になった。

みかんと言えど私など、ただ「みかん」という認識しかなかったが、甘夏、ぼんかん、いよかん、でこぼんをはじめ、温州みかん、きよみ、はるみ、せとか、はやか……と、まあ今や多種多様。大きさや色合いは様々だが、共通しているのは、どのみかんもとにかく驚くほど甘いということだった。甘みの追求こそが品種改良なのだと思ひ知らされた。

それから何日も経たぬうち、たまたまテレビで苺スプーンを話題にした番組を見た。そういえば最近²は、苺スプーンをほとんど目にしなくなつたと気づく。ひと昔前は、苺にはミルクや砂糖、あるいは練乳をかけ、潰して食べたものだ。酸っぱい苺が潰されて柔らかく程よい甘さになつて口のなかに広がった感触を懐かしく思い出す。

苺スプーンは文字通り、苺を潰すために便利なようにスプーンの丸い部分を平らに工夫したアイデア商品。金属洋食器の生産で圧倒的なシェアを誇る新潟県、燕市の金属会社の方が今から五十年前に考案したと番組では紹介していた。しかし、その苺スプーンの生産量もかつての四万本から七百万本にまで減つてしまったという。その理由は驚くほど明快だ。苺が甘くなつたから……なのだ。

今や苺は丸ごと食べることが当たり前、主流になつた。かつてのように潰して食べる味わい方はすっかり影を潜めてしまった。ミルクや砂糖をかけて食べる酸っぱい苺はどこかへ行ってしまったのだ。

そういえば、³と思ひ当たる。私の父は昔から焼きりんごを作るのが得意で、時折自分でりんごを買ってきては作り、出来立てを自慢げに食卓に並べ、家族に振る舞っていた。しかし、最近あまり焼きりんごにお目にかからない。

聞いてみたら、父は言った。

「近頃のりんごは甘すぎて焼きりんごの旨みが出ない。」

確かに最近⁴は、国光、紅玉などの酸っぱいりんごほどの店先にもほとんど置かれていない。これは聞いた話だが、日本の高級りんごをヨーロッパで売り出そうとしたが、甘すぎて支持を得られなかったという。

まあとにかく、みかん、苺、りんご、と最近の果物の甘みについての話題に立て続けに接して、今の日本が抱える問題点の某かのキーワードにぶつかったような気がした。確かに最近⁴は、口先がひん曲がるような味覚の果物には滅多にお目にかかれない。みかんも、苺も、りんごも、私たちは甘いのが美味しいという感覚に慣れ切つてしまったようだ。

果物だけではない。私たちの日常生活や身の回りにも「甘い」味覚に通じるようなものが満ちあふれている。ふわふわ、もちもち、ジュージュー、とろける……等々。人気を博すのはどれも、「甘く」「やさしい」「柔らかい」ものばかりだ。

明治生まれの祖母に幼いころ教えられたことを思い出す。さつまいもは別名「A里」と言うのだと言われた。それは、「栗より甘い」からだ。「栗(B里)より(C里)甘い」ということで、BとCを足した「A里」になつたのだ……祖母はそう言った。

栗の甘さ、あけびやグミの甘さ、ツツジやサルビアの花の芯を吸って、ささやかな蜜を口中で味わつたこと。かすかな甘みを目を閉じて味わうような刹那を、私たちは忘れてしまった。酸味のなかのほんのりとした甘みを味わう、あるいは、甘みを際立たせるために、西瓜に塩を振り、お汁粉に塩を忍ばせる……というような、甘みを引き立たせるために対極の味覚が不可欠という感覚が、なくなつてしまったのかもしれない。

いや、それだけではない。味覚や触覚だけでなく、私たちは、聞こえの良い、夢のような話に過度に傾いてやしないだろうか。

甘いものだけを受け入れ、それこそが幸せで、万人の幸福だという幻想の中に行くと、酸っぱいもの、ざらついたもの、辛いものは、ことごとく遠ざけたいくなる。しかし、当然のことながら、甘いものの中に行ったら、その甘さも感じられなくなつてしまうのだ。対極のものがあつてこそ、甘さの価値が際だつ。辛さ、苦さ、酸っぱさ、ごわごわ、冷たさ……。そういうものを遠ざけ、排除する不幸は、両者によつてもたらされる調和とバランスという、程よい味わいを手放すことなのだと思う。

どうして日本は、こんなにも平衡感覚を失つてしまったのか。その平衡感覚こそ、日本の至宝だつたのに……。

(神戸カンナ『冷蔵庫が壊れた日』による)

- 問一 —— 線部1 「さながら『利きみかん会』の場になった」とありますが、どのような会になったということですか、答えなさい。
- 問二 —— 線部2 「最近、苺スプーンをほとんど目にしなくなりました」とありますが、これはなぜですか。分かりやすく答えなさい。
- 問三 —— 線部3 「私の父は（ ）買ってきては作り」とありますが、父が買ってくるりんごはどのようなものですか、答えなさい。
- 問四 —— 線部4 「口先がひん曲がるような味覚の果物」とはどのような味の果物ですか、答えなさい。
- 問五 本文中の **A**、**C** に入る数字をそれぞれ漢字で答えなさい。
- 問六 —— 線部5とありますが、「味覚」に関して、「平衡感覚を失ってしまった」とはどのようなことを言っていますか、答えなさい。
- 問七 ……線部「今の日本が抱える問題点」とありますが、筆者はどのような問題点があると考えていますか、答えなさい。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

パッチワークと刺繡 おかしまひろこ
岡島弘子

1 地面と親しい背丈だったころ
 しゃがんで みつめると
 大地の中の
 ちいさな芽がわたしをみつめかえした
 芽はどれもこれも にかよっていて
 かわいらしかったが
 一週間むきあっていると
 すぐに正体がばれた²
 これはハコベラ
 あれはアカザ

わたしももうすぐ
 正体をあらわす³
 動物の仔でも
 ニンゲンのかたちは かくしようもなく

地面は
 ぐんぐん萌えて
 みどりの草でいっぱいになった
 あるきつくせないほど 展がった⁴
 草にねて
 みあげると 昼のさき
 太陽のかけには たくさん星があるようだった
 みわたしきれないほどの

4*
 5*
 パッチワークをちりばめた大地
 刺繡でいっぱい空

そのあいだで ゆっくり流れる 流される
 ちっぽけな わたし

*注 パッチワーク——小さな布をぬい合わせて、大きな布を作る手芸。

- 問一 —— 線部1 「地面と親しい背丈だった」とはどのようなことですか、答えなさい。
- 問二 —— 線部2 「正体がばれた」とはどういうことですか、答えなさい。
- 問三 —— 線部3とありますが、ここで「わたし」を「動物の仔」と表現したのはなぜですか。理由を答えなさい。
- 問四 —— 線部4 「パッチワークをちりばめた大地」とは「大地」のどのような様子を表していますか、答えなさい。
- 問五 —— 線部5とありますが、「空」が「刺繡でいっぱい」に思えたのはなぜですか。理由を答えなさい。
- 問六 この詩について説明したものとして、最も適当なものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。
 ア 風にふかれて雲の上で散歩することを、頭の中で思いえがいている。
 イ 草原にねころんで夜空をながめながら、未来の自分に期待している。
 ウ 植物の名前を当てるゲームをしながら、自然への関心を高めている。
 エ 春の大地から芽生えたあらたな生命と、わが子の成長を願っている。
 オ みずみずしい目で自然を見つめていた、昔の自分を思い出している。

受験番号

平成三十一年度

灘中学校入学試験問題

国語

二日目

四枚のうちの四枚目

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
							G	D	A
							H	E	B
							I	F	C

からだと考えている。

問六	問五	問四	問三	問二	問一

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
		A				
		B				
		C				